

農林水産大臣賞受賞

営農組合と元気村の両輪で
人づくり、村づくり、地域づくり

うみがみく
受賞者 **海上区**

みかたぐんしんおんせんちょう
(兵庫県美方郡新温泉町)

■ 地域の沿革と概要

新温泉町は、総面積 240 平方キロメートルで、兵庫県の北西部に位置し、北は日本海に面し、東と南は香美町、西は鳥取県に接する地域で、内陸部は 1,000m 級の山々に囲まれている。主要な交通基盤として JR 山陰本線、国道 9 号及び 178 号が東西に走っている。

■ むらづくりの概要

1. 地区の特色

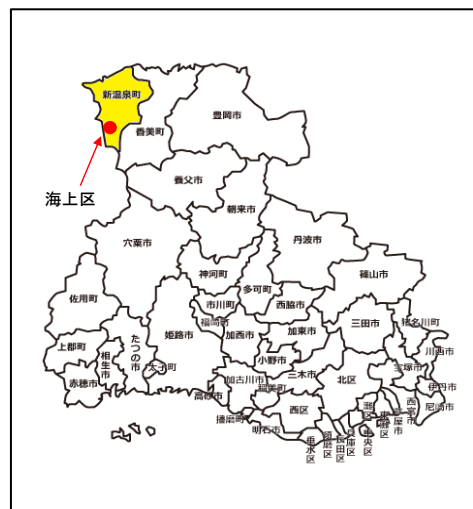
海上集落は、新温泉町の南西部にある上山高原うえやまこうげんの山麓に位置し、日本海に流れる岸田川の支流小又川こまたがわの最上流の集落である。周囲を 500～900m の山々に囲まれ、集落の標高は 350m～500m、冬には 2m 以上の積雪がある豪雪地帯である。

人口は 41 世帯 103 人（平成 30 年 10 月現在）で、高齢化率 62%となっており、少子高齢化が進んでいる。

集落の 38 戸が農家で、水稻を中心に営農しているが、但馬牛の繁殖との複合経営農家も 6 戸ある。水稻は、高地の棚田で気温の日寒暖差が大きいことから良食味のコシヒカリを生産している。

また、上山高原で夏場に行われている

第 1 図 位置図



第 1 表 地区の概要

事項	内容
地区の規模	集落(集落数1)
地区の性格	地縁的な集団等
農家率 (内訳)	92.7%
	総世帯数 41戸
	総農家数 38戸
専業別農家数 (内訳)	専業農家 3戸
	1種兼業農家 1戸
	2種兼業農家 34戸
農用地の状況 (内訳)	総土地面積 808ha
	耕地面積 26ha
	田 25ha
	畑 2ha
	耕地率 3.3%
	農家一戸当たり耕地面積 0.7ha

注：集落の数値

但馬牛の放牧風景は、季節の風物詩として訪れる人々を楽しませている。

2. むらづくりの基本的特徴

(1) むらづくりの動機、背景

集落の農地のほとんどは地形条件が厳しい山間の棚田で、地滑り地帯でもあることから、基盤整備が進んでおらず、農作業の作業効率、反収ともに低く、個別完結型の農業経営では採算性に課題を抱えている状況にあった。

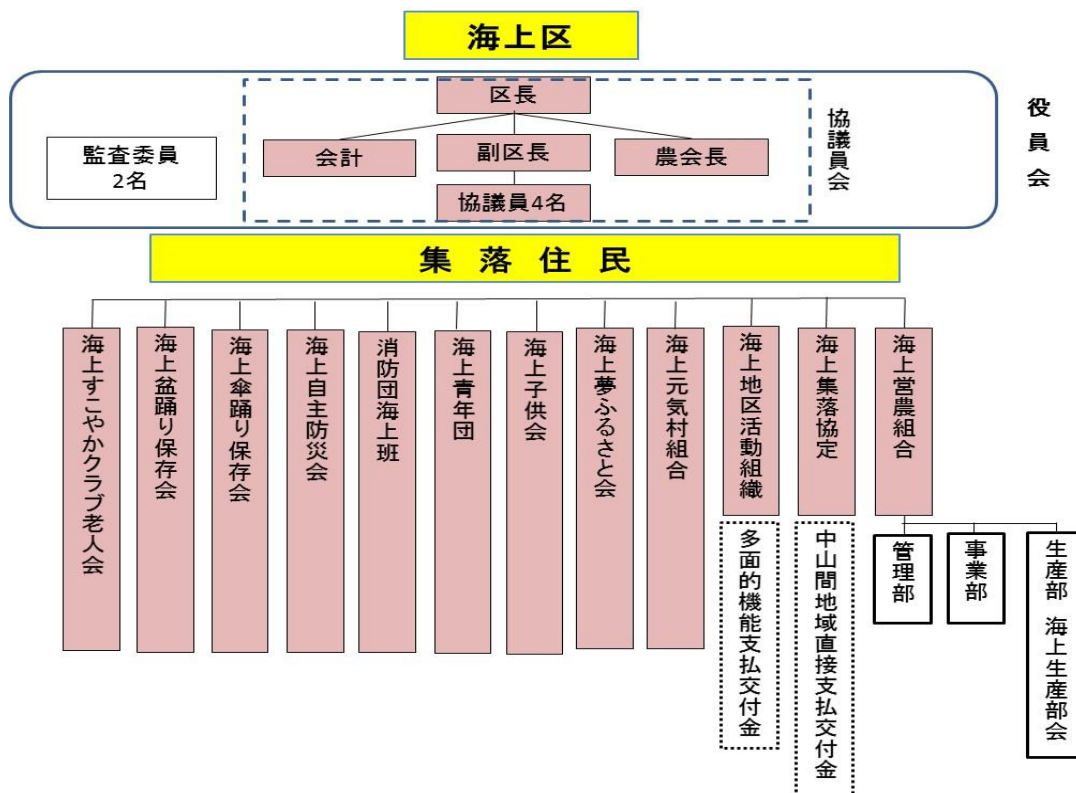
更には、農家の高齢化が進み後継者の確保も難しい状況にあったことから、『このままでは集落が無くなってしまふ、1年でも長く集落を維持したい』との集落住民の思いから、むらづくりの取組が始まった。

(2) むらづくりの推進体制

ア 海上区の組織体制及び連携する団体の状況

海上区は、区長、副区長、農会長、会計、協議員（4名）、監査委員（2名）の10名からなる役員会を中心に運営を行っており、海上営農組合、海上元気村組合、海上区集落協定（中山間地域等直接支払制度の協定組織）など、関係する集落内の全12組織が関わり、集落内の関係者、団体の全ての合意形成を図りながら種々の取組を展開している。

第2図 むらづくり推進体制図



イ 海上区と連携してむらづくりを行う主な他組織の状況

① 棚田を守る海上営農組合

海上営農組合は、主に水稲作の農作業受託活動を行い、営農コストの削減に貢献している。集落の全農家 38 戸が構成員となっており、6 名のオペレーターを確保し、水稲作付面積 14.4ha の大部分の基幹作業を受託している。

役員は、組合長以下 12 名で構成され、事業部・管理部・生産部の 3 部門を置いて活動している。

平成 19 年には、畜産との連携の下、生産部が棚田で生産する特別栽培米を「うみゃーなぁー」のブランド名で商品化し、同時に農地・水・環境保全向上対策に取り組む中で、棚田米生産農家はエコファーマー認定を取得した。現在は、G-GAP 水準の生産工程管理にも取り組んでいる。

② 「うみがみ元気村」を運営する海上元気村組合

海上元気村組合は、集落の交流拠点施設「うみがみ元気村」を運営し、食堂・直売所の営業や、海上区と連携して収穫祭等のイベントを行っており、組合長以下女性を含めた役員 10 名により構成された組織である。

食堂・直売所では、6 名の女性メンバーが中心となって、地域で生産される山菜や野菜を使った加工品の製造・販売を行っており、地元女性が腕を振るう郷土料理は、特に人気が高いメニューとなっている。



写真 1 交流拠点施設
「うみがみ元気村」

■ むらづくりの特色と優秀性

1. むらづくりの性格

海上区のむらづくりは、集落全体でアンケート調査やワークショップを行い、課題を共有した上で住民自らが検討を重ね、小規模な集落であるが、地域資源を有効に活用するとともに、地域住民自らが楽しみながら活性化を図っている。

特に、棚田で農業生産基盤としては厳しい条件にあるにも関わらず、全戸が参加して作成した「集落農業経営プラン」の実現のために組織した「海上営農組合」による基幹作業の受託体制を整えるとともに、但馬牛の素牛生産

システムとの連携や清流等の地域資源を活用した棚田ブランド米「うみゃーなぁー」を企画するなど、地域の特色を活かした活動によって集落農業の活性化を図ってきた。

また、交流拠点施設「うみがみ元気村」を契機に、農産物加工・直売所、食堂の立ち上げにより、女性の活躍・生きがいの場を創設し、地域内外との交流の促進を図る等、地域コミュニティの形成が継続されている。

更に、「うみがみ元気村」で製造された農産物加工品や棚田ブランド米「うみゃーなぁー」を大都市のアンテナショップや道の駅等で展示販売することにより、女性メンバーの活躍の場の創出や棚田米生産農家の農業経営の安定を生み出しているとともに、地域の大切な資源である棚田の保全や農村景観の維持が図られており、これらの取り組みによって、集落機能を適切に維持・発展している。

2. 農業生産面における特徴

(1) 農林漁業生産、流通面の取組状況

ア 営農組合による農作業の省力化

海上区の主要作目である水稻の生産について、集落で作成した「集落農業経営プラン」に基づき組織された海上営農組合が、水稻栽培に必要な農業機械装備一式を保有し、構成員からの依頼に応じて基幹農作業を受託し、構成員の農業経営を支えており、高齢化が進んでいる集落の耕作放棄地の発生防止など棚田の保全に大きく寄与している。

平成19年からは、海上営農組合の8名の生産部会員により、集落上流で生活排水の流入がない水田で、清流水と但馬牛を活用した米作りを開始し、棚田ブランド米「うみゃーなぁー」を商品化し、現在では7名の生産農家により約2haの農地で、年間約9t生産するまでに拡大し、近隣の消費者や民宿・旅館等との契約販売を中心に安定した農業経営の実現を得ることが出来ることとなった。



写真2 棚田ブランド米
「うみゃーなぁー」

また、棚田ブランド米「うみゃーなぁー」の生産開始と同時に、農地・水・環境保全向上対策の営農活動支援にも取り組み、化学肥料や化学合成農薬の低減栽培を実践し、エコファーマーの認定を取得しており、平成30年からは環境保全型農業直接支払交付金の要件変更に伴い、G-GAP水準の生産工程管理も開始している。

イ 上山高原のススキ草原の再生活動への参画

上山高原では、畜産の衰退に伴い、放牧牛が減少したことにより、高原の荒廃・原野化が進行したが、兵庫県及び新温泉町の支援のもと、NPO法人上山高原エコミュージアムが中心となって、ススキ草原の再生やブナを中心とした落葉広葉樹林の再生など自然再生の取組を進めている。

海上区においても、この再生活動に協力し、再生されたススキ草原での春の火入れ、刈り取りなどの管理を担うとともに、7月から9月までの夏場には、畜産農家が飼育している但馬牛の放牧を復活させるなど、上山高原の景観も含めた2次的自然環境の再生活動に参画している。

これらの取り組みにより、集落内での但馬牛の繁殖と経産牛の肥育による食用牛の成育を安定的に営むほか、上山高原の多様で豊かな自然が再生されることにより、海上区の水田の水源地としての機能が維持され、清流を活用した棚田ブランド米の安定生産にも繋がるとともに、畜産農家では後継者の確保にも資している。



写真3 上山高原で放牧される但馬牛

ウ 女性の活躍による特産品の産出

平成23年に完成した「うみがみ元気村」では、加工・直売施設・食堂及び憩いの部屋が整備され、地元産の山菜や野菜を使ったみそ、佃煮などの加工品の製造・販売を行い、食堂では地元女性が郷土料理の提供も行っており、棚田ブランド米「うみゃーなぁー」を使用した牛肉うどん定食やばっこう牛肉丼（但馬牛の経産牛の食肉をこの地域では「ばっこう牛」と呼び、郷土料理に利用している。）など、地元の女性6名が郷土料理を提供している。



写真4 うみがみ元気村のばっこう牛丼定食

食堂は週3日（水・土・日）の営業にもかかわらず、初年度の平成23年は、村内・村外から延べ約1,300人の利用者があり、それ以降口コミで広がり、観光客等の集落外から訪れる人が増え、平成30年度には延べ約2,500人（約4割は地区外の利用者）にまで増加している。

また、直売所では、棚田ブランド米「うみやーなあー」をはじめ、地元でとれた野菜や、芝桜みそ、フキの佃煮、ふきのとうみそなどの加工品の販売を行っており、これらに加え、農繁期には、農家が営農しているほ場まで弁当仕出しの配達を行ったり、正月の餅、節分の巻き寿司など、住民の要望に応じた季節ごとの農産物加工製造を行っている。



写真5 地元農産物の加工品

特に弁当仕出しは、地元食材を使ったメニューが好評で、地区外からの注文もあり、多い日には100食あまり提供することもある。これらに用いる食材は、集落住民により栽培・採取されたものが中心で、「元気村」で買い取り、加工販売しているものである。

平成25年からは、神戸市元町のアンテナショップ「ひょうごイナカフェ」や同市内のマルシェで、兵庫県地場産品として展示販売、平成29年9月からは、新温泉町にオープンした道の駅山陰海岸ジオパーク「浜坂の郷」での販売を開始する等、村の中に女性が生き生きと活躍できる場と小さな経済を生み出している。

3. 生活・環境整備面における特徴

(1) うみがみ元気村の「憩いの部屋」

交流拠点施設「うみがみ元気村」は、食堂及び加工・直売施設としての機能のみではなく、建物の約35%を占める空間を集落内の住民であれば365日24時間、自由に利用出来るコミュニケーションスペースとして開放している。

この「憩いの部屋」には、テレビ、こたつ、コーヒー等が準備されており、一人暮らしの高齢者の方々の井戸端会議やお茶会や集落内の仲間内での情報交換の場として利用されるなど、地域のコミュニティ活動の拠点であり、独居老人の孤立を生じさせない場ともなっている。

(2) コミュニティ活動の強化、都市住民との交流

海上区が20年間取り組んできた「芝桜フェスティバル」では、地元の山菜や加工品の販売、伝統芸能「海上傘踊り」の披露などにより、地域内外との交流が図られてきた。その後、「うみがみ元気村」の完成を契機に、イベントへの取り組み方を地域住民が楽しむことが出来る内容に見直し活動を継続しており、集落住民の活力源となっている。

近年では、うみがみ元気村組合と営農組合生産部によって、県の消費者生産者連携促進事業の活用により、県内の大学生を中心に交流参加者を募っての稲刈りや、近隣の児童による芋掘り体験等の交流イベントを開催するなど、都市住民との交流を深める取組に内容も広がりを見せている。

(3) 女性の社会促進の状況

交流施設「うみがみ元気村」の食堂、農産物加工施設では、6名の女性メンバーが中心となって、地元の山菜や野菜を使った加工品の製造・販売、郷土料理の提供等に取り組んでいるが、以前は地域外で仕事を持っていた女性が、退職をきっかけに、高齢となった女性の後継者として新たにメンバーに加わるなど、地域内で安定した女性活躍の場所となっている。



写真6 うみがみ元気村 食堂の様子

(4) 定住化への期待

交流拠点施設「うみがみ元気村」をメイン会場に、地域外の住民との交流イベントを海上区民自らが楽しむことに主眼を置いた内容に見直した結果、集落出身者と膝詰めの交流が出来る様になったことから、来春の定年後にUターンして帰農するとして、週末に農作業のため集落に戻るなどの動きもあり、更に、各種の交流イベントを通じ、Iターンを目指す取り組みの兆しも見られ、これら帰農者等が新たな地域活動の担い手となることが期待されている。



写真7 元気村で開催された
収穫祭の様子

また、集落に実家があり地域外に住んでいる家族世帯は、お盆や正月、ゴールデンウィークはもとより、地域で開催されるイベント等を楽しみに帰省するため、日頃空き家としている家屋の維持管理もしっかり行われており、帰省の時期には、集落人口は通常の数倍以上となり、賑わいを取り戻す期間となっている。